

氷海からの生還

長尾三郎

著者 | 長尾三郎 1938年、福島県生まれ。福島高校卒業。早稲田大学第一文学部演劇科中退。在学中から著述業に入り、現在、政治、社会問題、スポーツなど幅広く活躍中のノンフィクション作家。『マッキンリーに死す』(講談社)で講談社ノンフィクション賞受賞。他の著書には、『エベレストに死す』『二つの墓標』『生き仏になった落ちこぼれ』(いずれも講談社)、『若者は叛逆する』(明文社)、『愛と人間』(共著・TBSブリタニカ)、『団塊世代まかり通る!!』(グリーンアロー出版社)、『飛天の夢・古寺再興』(朝日新聞社)など多数ある。

ひょうかい せいかん
氷海からの生還

なが お さぶろう
長尾三郎

© Saburo Nagao 1990



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1990年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184678-7



講談社文庫

氷海からの生還

講談社

氷海からの生還

□□□□ 目次 □□□□

第一章

出航

それぞれの人生を乗せて……………7

第二章

遭難

後家づくりの「海の墓場」……………53

第三章

漂流

死の海を漂う救命ボート……………87

第四章

原因

「赤いクジラ」説の謎を追う……………133

第五章

葬儀

戒名をつけられた男たち……………171

第六章

奇跡

「カモメを捕って食うべ」……………207

第七章

生還

最北の港に渦巻く明暗……………237

エピソード……………276

引用・参考文献……………289

文庫版あとがき……………291

解説——土井全一郎……………296

第一章

出航

それぞれの人生を乗せて

1

「ボートに誰がいちばん最初に乗ったか、わかんねエなア。ボートは海に落ちたって、すぐ開かねエ。加川^{かがわ}たちも天幕がすっかり開かねエのさ乗って、開いたとき海の中さまた振り落とされたといったもん。もう気が動転してたからな」

稚内^{わちない}の沖合底引き漁船、『第七十一日東丸』^{につどうまる}の甲板長^{こうばんちやう}・池田良助^{いけだりやうすけ}（43歳Ⅱ当時、以下同じ）の記憶では、地獄のオホーツク海にのみ込まれた恐怖の一瞬は今なお不鮮明な空白となっている。それほど日東丸の沈没は、一瞬のできごとで、脱出するのに無我夢中だったからだ。

池田は日頃から眠りが浅く、ロープの切断や小さな流水に衝突したときなど、わずかなショックでも目がさめる癖がある。これは、板子^{いたこ}一枚下は地獄、といわれる海で働く男たちの習性で、別に池田だけではないが、その日、昭和六十年四月二十二日の午後十時すぎから、池田は船体後部の居住区、右舷寄り船員室の二段ベッドで仮眠していた。靴はぬぎ、ジャージの上下、靴下二枚という姿である。

そこには操機長の小林照夫（43歳）、操機手の渡辺東作（45歳）が同じように束の間の睡眠をとっていた。曳網中は当直体制であり、ブリッジ（操舵室）にいる漁労長の本間政二（36歳）、船長の北島章弘（48歳）、通信長の橋本富雄（40歳）、それに機関室の伊庭保之助（47歳）の四人を除いて、他の乗組員たちもそれぞれのベッドで眠っていた。漁労長、船長、通信長の三役が一緒に当直していることはよくあることだ。

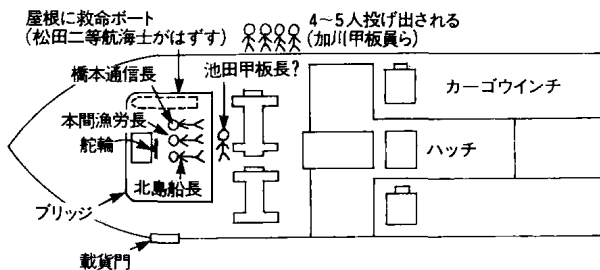
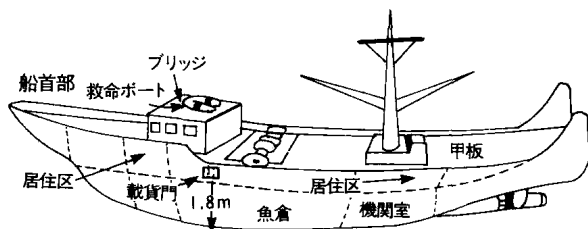
うたたねしていた池田は、甲板員・金子忠夫（46歳）の声で目がさめた。異常を察知してすぐ飛び起き、靴下のままベッドから食堂に出た。通路にはすでに十センチくらいの浸水があった。ただごとではないと思い、池田は階段をのぼって船楼甲板の船首にあるブリッジに向かう。そのとき作業場の左舷後部で金子が排水ポンプを作動させているのを見た。上の甲板に出ると、初めて船体傾斜を感じた。船は左舷側に傾いており、左舷甲板側が海水に浸っている。

ブリッジにたどり着くと、漁労長の本間と、船長の北島、それに通信長の橋本がいた。北島は左舷主機のリモコン前、本間は操舵機前、橋本は二人の中間にいて、別段あわてている様子はない。何も異常に気がついていないのか。浸水の状況を知っている池田が、大きな声で叫んだ。

「アカ（海水）がきた！」

すると北島は何もいわず、バラスト（排水）タンクの操作盤のところへ行き、橋本はマイクを取った。本間は舵をとっていたが、しかし、池田が「アカがきた！」と叫んでも、三人からは何

事故当時の第71日東丸



の指示もなかった。

池田が仮眠室を飛び出し、ブリッジにいた三人の姿を見るまで、ほんの二、三分しか経っていない。要領を得ないまま、池田は急いでブリッジを離れた。船は急速に左に傾いていく。池田は右舷のロープを握って辛うじてバランスを保っていたが、それも一瞬のことと、さらに船は左舷側に傾斜していき、右舷の船腹が出てきた。あわてて高くなった右舷側に寄る。間もなく船は左舷側に沈没していき、池田の体は引き込まれるように海中に沈んだ。

浮きあがったところに救命ボートがあり、池田はそれに必死につかまる。そして先に乗っていた今野春雄

(51歳)に引き揚げられた。今野は、妻のトキによると、中学時代は水泳が上手で、動作が敏捷(びんせう)だった。異常事態の中で、いち早く船から脱出、救命ボートに乗ったのだろう。

救命ボートは甲板員・松田敏之(まだとしゆき)(40歳)が海中に投じたものだ。このボートは正式には「甲種膨張式救命いかだ」といい、長さ五・三メートル、幅二・九メートル、高さ一・五メートルのナイロン布製のカバー付きで、二十人乗りのゴムボートである。

ふだんは船体横のカプセルに収納されているが、いったん船体に異常事態が発生し、水深三メートルまで船が沈むと、水圧で自動的に離脱し、炭酸ガスなどからなる充気装置で自然に膨張する仕組みになっている。日東丸の場合は、異常を察知した松田がとっさの機転で、ブリッジ上部にあったカプセルの自動離脱装置を外した。

松田は二十二日午後九時頃から、自分のベッドでうとうとしていた。眠り込んではいない。突然、誰かが大声で叫んだので飛び起きると、船はすでに左に傾いていた。立ちあがると海水が膝上十センチまできている。通路には約三十センチの浸水があった。船体は左舷に約十五度ぐらい傾斜している。「沈むー」と直感した松田は、こた返す通路を伝わって、左舷船室入口から船尾甲板に出た。すぐさま右舷に回り、ブリッジの救命ボートのところに行く。二等航海士の免状を持つ松田は、講習を受けた際、救命ボートの扱い方を習って知っていた。それがとっさの瞬間に役立つ。

「とにかく救命ボートだと思った。自分の判断で離脱装置を外した」

この直後に船は沈没する。松田は甲板の上にいたとき、船のほうがあるまま沈み、海中に放り出された。夢中で救命ボートにしがみつく。海上に投げ出されたボートが、自動的に膨らむまでに約三十秒かかる。松田はまだ完全に膨らんでいないボートに必死でもぐり込んだ。今野もほぼ同時に乗ったようだ。この今野が池田と河田武治（54歳）を引き揚げた。松田が飛び起きてボートに乗るまで約二分しか経っていない。

同じ甲板員・加川武太郎（35歳）の場合は、寝ていたとき食堂からワーツという声がして目がさめ、枕元に外していた時計を見たら一時か二時だった。加川は極度の近視で眼鏡をかけているが、寝るときは眼鏡を外して時計と一緒に置く。その眼鏡を探す暇もなかった。飛び起きざま、ジャージーの上着をひっかけながら命からがら脱出した。厨房には水がきており、金子が立っているのが見えた。

階段付近で浸水は太腿まであり、作業場通路には勢いよく海水が流れ込んでいた。上の船楼甲板に出たときの傾斜は約十五度ぐらい、右舷側のロープにつかまり、ウインチの前に出る。この辺に甲板手・山野忠光（43歳）、小林らの姿が見え、加川を加えて「四、五人いた」という。

仮眠室を出てこの場所まではほんの三十秒から一分ぐらい。この一分後にエンジンが停止し、照明が消えた。あたりは一瞬にして真っ暗闇となり、悲鳴と絶叫の世界が現出する。船は次の瞬間アツという間に、左舷側に横転、沈没した。

加川は右舷側の高い場所を逃げまどっていたが、船が沈むと同時に海中に転落する。夢中で

四、五回平泳ぎで海水をかくと、そこに運よく救命ボートが漂っていた。必死でそれにすがりつく。

「ボートには松田、今野、池田さんがいて、おれは四番目かなあ。最後に河田さんが乗った」

と加川は私にこう話したが、別のところでは異なる証言をしている。

救命ボートにしがみついたものの、ボートはまだ開いていなかった。天幕の上であわてて開張ロープを引っ張ると、ロープが足にからまり、そのはずみで再び酷寒の海中に放り出された。ところが幸運にも、ロープが足に巻きついていたため、転落の反動でグイと引っ張られた形になり天幕がパツと開いた。加川はそれこそ「命綱」となったロープを伝わって、必死になってボートの中に這い上がった。つまり加川がボートに一番乗りしたことになる。間もなく一人、二人とボートにしがみついてきた。

一瞬の地獄の中で、救命ボートに乗り移った状況が加川の中で二転三転し、各人の記憶にも食い違いがある。それほど恐怖の一瞬は、不鮮明な空白となっている。池田の記憶も異なる。

「おれ、乗ったときは四人いたと思うんだ。おれがいちばん最後だったと思ったんだけどなあ。おれは今野さんに引き揚げてもらった。外は真っ暗闇で顔なんかわかんねえ。ただ声で誰が乗ってるかわかっただけだ。顔ははっきりとわかったのは夜が明けてからだ。あとで聞いたら、河田さんはカナヅチだったそうだ」

日東丸は、金子が浸水に気がつき、異常を告げた瞬間から、約二分のうちに沈没している。こ

の間に飛び起き、脱出できた五人だけが救命ボートに乗り込むことができた。熟睡していた人たちは間に合わなかった。そして海中に放り出されたとき、真つ暗闇の海でどんなサバイバルのドラマがあつたのか。すぐそばに松田の投じたボートがあつたかどうか、十六人の生死を分けることになった。

五人が乗ると南西の風が出てきて、救命ボートは真つ暗闇の海をすぐに流され始め、「仲間を探す余裕はなかった」と松田はいう。ボートに乗ることができなかった他の十一人の乗組員たちは、たちまち魔の氷海に沈んでいった。

日東丸が沈没した地点は、北緯四七度四一分、東経一四四度二五分と推定されている。五人を乗せた救命ボートは、海の藻屑と消えた日東丸の沈没地点から、すぐに激しい海流に押し流されていく。これが「悪夢」のような極限漂流の始まりだった。

2

運命の昭和六十年四月二十日の朝、『第七十一日東丸』は五日ぶりに稚内港に帰ってきた。甲板員の加川武太郎によると、今回の漁獲は「まあまあ普通」というが、その積み荷を降ろし、この日の正午には再び漁に出ることになっていた。

日東水産の所有するこの船は、昭和五十四年七月に室蘭むろらんの檜崎造船ひさきぞうせんで建造された沖合底引き漁船で、総トン数は百二十四・九五トン。長さ三十二・一九メートル、幅七・三八メートル、深さ四・六一メートル。主機関ディーゼル千二十五馬力の十六人乗りで、その年の九月に進水した。

日東丸は、オッタートロール式二層甲板型の底引き網漁船で、後樂園球場（現、東京ドーム）がすっぽり入るくらいの大きさの網を海底三、四百メートルの深さで引いて、日本人の食生活から切り離せないスケトウダラなどを捕る船だ。上の「船楼甲板」には、船の中枢機関であるブリッジが一段高くなっており、トロールウインチなどの漁獲設備がところ狭しと備えつけられている。真ん中にある「上甲板」には漁獲物処理場があり、あとで大問題となる「載貨門」さいかど（十ペー